

台湾における日系企業等への再訪記録 一 2017年2～3月 一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Koizumi, Tatsuya, Benno, Saiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050913

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



台湾における日系企業等への再訪記録 – 2017年2～3月 –

古泉達矢^{1*}・弁納才一²

2017年7月18日受付, Received 18 July 2017
2017年11月17日受理, Accepted 17 November 2017

A Report in Relation to a Third Visit to Japanese Companies and other entities in Taiwan from February to March 2017

Tatsuya KOIZUMI^{1*} and Saiichi BENNO²

Abstract

From February 27 to March 5, 2017, a group of Kanazawa University students traveled to Taiwan with the authors of this report. As was the case on the last occasion in March 2016, this trip was primarily aimed at giving students an opportunity to learn about working conditions and experiences in foreign countries from the perspective of Japanese workers in companies and institutions operating there. Also, this trip was intended to give participants an opportunity to study Taiwanese culture and society through visiting museums and academic institutions. Altogether seven students joined the trip. We visited one non-governmental organization, three companies, and several museums and academic institutions, including Academia Sinica and National Taiwan Normal University.

Key Words: academic institution, Japanese company, museum, Taiwan, university

キーワード: 台湾, 日系企業, 大学, 博物館, 研究機関

I. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類アジアコースの教員である著者らは、2015年3月および翌16年の3月に、国際学類の学生を引率して台湾における日系企業や研究機関・大学等を訪問した（弁納・古泉，2015；弁納・古泉，2017）¹⁾。2016年度は前年度に引き続き、金沢大学の全学的な取り組みとして、2017年2月27日（月）から3月5日（日）にかけて、本学人間

社会学域国際学類・人文学類・法学類・経済学類の計7名の学生を引率して台湾を訪問した（表1, 2）。

この事業の主な目的は、まず台湾の日系企業で働く方々から、海外での仕事や生活についての経験を聞くことにより、海外で働くことの実態に触れること、次に現地の博物館や学術研究機関を訪問したり、大学で学生と交流する機会を持ったりすることで、台湾の社会や歴史について学ぶこと、の2点にある。さらに、本学の学生を引率することで、訪問先の企業に対して本学の認知度を上げることもまた、本事

¹金沢大学人間社会研究域法学系 〒920-1192 石川県金沢市角間町（Faculty of Law, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan）

²金沢大学人間社会研究域経済学経営学系 〒920-1192 石川県金沢市角間町（Faculty of Economics and Management, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University, Kakuma-machi, Kanazawa, 920-1192 Japan）

*連絡著者（Author for correspondence）

表1 行程や活動の概要.

Table 1 Itinerary and outline of the activities.

日付 (2017年)	滞在地・移動経路	活動内容	宿泊先
2月27日	小松空港 (BR157) → 桃園空港	移動	ホテルYMCA台北
2月28日	台北市	午前：国立台湾大学付属病院, 台北二二八紀念館 午後：「共生音楽節」の会場見学, 總統副總統文物館, 國父紀念館	ホテルYMCA台北
3月1日	台北市	午前：中正紀念堂 午後：台北市日本工商会	ホテルYMCA台北
3月2日	台北市	午前：中央研究院 午後：台湾大学, 台湾師範大学	ホテルYMCA台北
3月3日	台北市	午前：YKK台湾 午後：台湾SONY, 日勝生加賀屋	ホテルYMCA台北
3月4日	台北市	午前：故宮博物院 午後：淡水 (紅毛城など)	ホテルYMCA台北
3月5日	桃園空港 (BR158) → 小松空港	移動	

表2 参加者一覧.

Table 2 List of participated students.

氏名	学類	学年	担当
大木紗英子	人文学類	1年	日本工商会との連絡・調整, 国立台湾大学, 台北二二八紀念館, 紅毛城, 中央研究院の下調べ
村井佑衣	国際学類	1年	日勝生加賀屋との連絡・調整, 台湾師範大学, 国史館, 士林官邸, 温泉博物館の下調べ
小林茉樹	国際学類	1年	YKK台湾との連絡・調整, 国史館, 士林官邸, 温泉博物館の下調べ, 台湾師範大学留学中の張間美香との連絡・調整
志摩苑子	法学類	1年	日勝生加賀屋およびYKK台湾との連絡・調整, 台湾師範大学, 国史館, 士林官邸, 温泉博物館の下調べ
半田千尋	経済学類	1年	日本工商会との連絡・調整, 国立台湾大学, 台北二二八紀念館, 紅毛城, 中央研究院の下調べ
松岡七海	経済学類	1年	台湾SONYとの連絡・調整, 故宮博物院, 中正紀念堂, 國父紀念館の下調べ
吉澤美美	経済学類	1年	台湾SONYとの連絡・調整, 故宮博物院, 中正紀念堂, 國父紀念館の下調べ

業の持つ役割の一つと言えるだろう。今回の研修では、昨年訪問できなかった台湾索尼股份有限公司(台湾SONY)や、新たに本学とのインターンシップ事業が予定されている台湾華可貴股份有限公司(YKK台湾)を訪問し、従業員の方々と交流する機会を持つことができた。

以下、前年度と同様に今回の研修の概要を記し、今後の研修事業の参考に資することとしたい。

II. 企業など

今回の渡航では、諸般の事情により前回まで訪問

していたJTB台湾への訪問は断念した。

1) 台北市日本工商会 (中正襄陽路9号富邦城中大樓7楼)

3月1日(火) 14:00~15:50, 台北市日本工商会(図1)を訪問し、総幹事の前田吉徳氏のお話を拝聴させて頂いた。昨年同様に、まずは中国に関心を抱いたきっかけから、商社マンとしての活動、さらに退職後に台湾での仕事についての経緯を聞かせていただいた。今回は2度目の訪問ということもあり、昨年よりも滞在していた各地での生活をより細かく話して下さった。前田氏の話は多岐に渡ったが、筆者には



図1 日本工商会。

Fig. 1 The Japanese Chamber of Commerce & Industry Taipei.

1982年からの最初の北京駐在時代の日常生活（当時は18:00には必ず夕食をとりて外出した、20:30を過ぎると街中は真っ暗だった、など）や、改革・開放政策導入以降の中国の変化を「自分の体で」感じることができた、というお話が印象に残った。

学生との質疑応答では、在学中には様々な知識を積み上げてほしい、日本と世界の歴史をよく勉強してほしい、絶対に英語をよく学んでほしい（前田氏は学生時代に会った高名なビジネスマンから、英語は当然として、その他に1つ、さらに可能であればもう1つ、自由に弁じ得る言語があると良い、と言われたそうである）というアドバイスを頂いた。また、思い込みを持たずにビジネスの相手と接することの重要性を強調されていた。中国をはじめ東アジア各地に住む人々は、日本人と見た目が似ているために、ビジネスを進めていく上で双方に誤った思い込みが生まれ易いとのことである。この点は、東アジアを対象として研究している我々の体験とも通じるものがあり、興味深く感じた。以上のアドバイスは、本研修に参加した学生の心にも深く響いたものと思われる。

2) 台湾華可貴股份有限公司（台北市民権東路二段40号8楼）

3月3日（金）10:00～12:00、台湾華可貴股份有限公司（以下YKK台湾と略）を訪問した（図2）。同社では、総経理である神谷佳尚氏（台湾へ着任する前に香港・澳門でも勤務した経験があるという）以下、今回の訪問をアレンジして下さった管理部経理の

竹本哲也氏をはじめ、7名の従業員による出迎えを受けた。まず、YKK台湾側から事業内容の紹介があった。同社はファスニング事業（ファスナーの開発・製造）およびAP（ガラス戸やドアなどの建材）事業を中心として、グローバルに事業を展開している。台湾における支社は1966年3月に設立されたが、建材の事業を手がけるようになったのは1989年からとの事である。台湾では、ファスニング事業では3箇所の営業拠点と2箇所の製造拠点を、同じく建材事業では3箇所の営業拠点と1箇所の製造拠点を、主に西側の平野部に構えている。顧客には台湾の企業だけでなく、同地に進出した欧米のアパレルメーカーなども含まれており、こうした企業との取引には英語によるコミュニケーションが欠かせないとの事であった。

続いて竹本氏による進行に従い、2つのグループに分かれてディスカッションを行った。今回のディスカッションには、入社年度が1990年代後半以降の比較的若い従業員の方々が、2つのグループに分かれて参加して下さいました。ご参加いただいた方々の経歴は幅広く、大学については文系・理系双方（国際学部・外国語学部・生活環境学部・工学部・経済学部）の出身者が含まれていたほか、本学の卒業生もおり、それぞれのグループで大変熱の入った議論が行われた。このグループディスカッションは後述する反省会において、研修に参加した学生から、比較的年齢の近い方々に台湾で働くことの実情を聞くことができよかった、との高い評価を受けた。続いてYKK台湾の社屋内に設置されているショールームを見学した後、同社の向かい側にあるホテルへ移動し、ディスカッションに参加して下さいました方々と昼食をとりながら、午前中とは異なる雰囲気の中で歓談させて



図2 台湾華可貴股份有限公司（YKK台湾）。

Fig. 2 YKK Taiwan Co. Ltd.

いただいた。

2017年3月現在、YKK台湾と本学との間では、インターンシップの計画が進んでいるとの事である。今回の訪問と同様に、こちらの計画も実り多いものとなることを期待したい。

3) 台湾索尼 (SONY) 股份有限公司 (台北市中山区長春路145号5楼)

3月3日(金)、上述したYKK台湾を辞去した後、徒歩で台湾索尼股份有限公司(以降、台湾SONYと略)へ向かった。13:50に同社の入っているビルへ到着すると、本学との連絡を担当していただいた公共関係および策略規画部門協理の尾本慶氏が出迎えて下さった(図3、4)。



図3 台湾索尼股份有限公司(台湾SONY)。

Fig. 3 Sony Taiwan Limited.



図4 台湾SONYの入り口に掲げられたプレート。

Fig. 4 A plate exhibited in front of the Sony Taiwan's office welcoming Kanazawa University's students.

まず董事長兼総経理である大槻裕三氏から、新入社員向けのスライドを用いて、同社の概要や大槻氏の持つ仕事に対する考え方を披露していただいた。大槻氏は大学の経済学部を卒業後、SONYへ入社し、台湾以外では日本の本社をはじめ、香港・深圳・ベトナムで勤務した経験がある。台湾SONYは現在360名ほどの社員を擁しており、そのうち日本人は30名程度である。会議は基本的に英語が多いものの、部署によっては日本語、あるいは日英両方の言語を用いる場合もあるそうだ。大槻氏からは、自己の能力を向上させるために、仕事の中に何か興味を持てるようにしてほしい、また仕事に際しては、相手となる人々と正面から取り組んで、信用を勝ち得てほしい、とのアドバイスを頂いた。

質疑応答の後、大槻氏が退席してからは、引き続き尾本氏と歓談した。尾本氏はSONY入社後、当初は日本でセールスに携わっていたが、その後ベトナム・イラン・ベトナムでマーケティングを担当し、台湾SONYへ赴任したそうである。自身の豊富な海外での経験に基づいて、海外へ赴任する者に求められる役割や心得について語っていただいた。

尾本氏からいただいたお話は、仕事への臨み方に関するものであったが、海外における生活一般や異文化理解にも通じる内容であり、興味深いものだった。とりわけ海外の駐在先において、日本人にしかできない役割についてのご指摘からは、学ぶことが多かった。記念撮影の後、同社を15:45頃に辞去した。

4) 日勝生加賀屋(台北北投区光明路236号)

3月3日(金)、上述した台湾SONYを15:45頃に離れ、北投にある日勝生加賀屋へと向かった。同社には当初の予定であった16:30より15分ほど遅れて到着したが、入り口で董事である徳光重人氏から温かい歓迎を受けた(図5)。

昨年同様、徳光氏に旅館内の各所を案内していただいた後、会議室において同氏と歓談させていただいた。徳光氏の話は、自身の経歴から加賀屋のビジネス、金沢出身の土木技師である八田與一の台湾での業績、さらには自身の人生哲学にまで及んだ。以前訪問させていただいた時と同じように、徳光氏の話は大変熱が籠っており、学生はいずれも熱心に拝聴していた。さらに徳光氏からは、自身が出版に関わった北國新聞出版局編『回想の八田與一』(北國新



図5 日勝生加賀屋.

Fig. 5 The Radium-Kagaya International Hotel Co. Ltd.

聞社、2016年)を頂戴した。

個人的には、中華系の旅行客に対して、日本の文化を中国語で伝えることに、その使命とビジネスチャンスを見出したという話と、目の前にあるチャンスを照らす夢を持つことの大切さを強調されていたのが印象的だった。遅い時間だったので学生は疲れていた筈だが、徳光氏との質疑応答は大変な盛り上がりを見せ、予定の時間を大幅に超えて18:30頃に同社を辞去した。

なお、昨年同様に日勝生加賀屋を訪問した折に、北投にある温泉博物館や、近隣に位置する士林官邸も訪問する予定だったが、時間が遅かったので今回は断念した。

Ⅲ. 大学・資料館など

1) 總統副總統文物館

2月28日(火)の午後、国史館に併設されていた總統副總統文物館を参観した。昨年訪問した際からあまり大きな相違は見受けられなかったが、2016年5月に民進党の蔡英文が總統へ就任したために、新しく蔡氏と副總統の大きな写真が飾られていた。

2) 中央研究院

3月2日(木)の午前中に訪問した(図6)。まずは台湾史研究所を訪れ、檔案館閲覧室において資料の閲覧などについての説明を聞いたほか、資料の検索などを実際に体験した。今回の訪問に際して、我々は研究所へ事前に何らアポイントを取っていなかったが、檔案館のスタッフは丁寧に対応して下さった。



図6 中央研究院.

Fig. 6 Academia Sinica.

中国大陆の文書館ではまず起こり得ないことであり、改めて台湾における研究・調査環境がいかに優れているかを実感した。また学生諸君にとっても、我々研究者の日常の一部である史料調査の様子を垣間見ることができた点で、教育効果もあったものと考えられる。

その後、学术交流センターへ移動し、地下1階の書店にて書籍を購入した。

3) 国立台湾大学

3月2日(木)の午後に訪問し(図7)、同大学の歴史についての展示がある校史館(図8)とその横に設置されている人類学博物館、および図書館を参観した。校史館では、中華民国期の中国で歴史学・言語学において業績を上げ、のちに台湾大学の学長となった傅斯年を顕彰する展示があった。また昨年訪問した際には、開館時間を過ぎていたために見学することができなかった人類学博物館も、今年はゆっ



図7 国立台湾大学.

Fig. 7 National Taiwan University (NTU).



図8 国立台湾大学 校史館.
Fig. 8 NTU History Gallery.

くり見学することができた。一方、昨年訪問した折に台湾の歴史をめぐる興味深い企画展を見ることができた大学図書館には、今年は何ら特別な展示物は設置されていなかった。

なお、台湾大学で入手したパンフレットによれば、同大学では上述の2つの博物館のほかに、地質標本館、物理文物庁、昆虫標本館、農業陳列館、植物標本館、動物博物館、檔案館、医学人文博物館が設置されているとのことである。

4) 国立台湾師範大学

3月2日(木)の午後、台湾大学を離れてから同大学周辺の書店を散策した後、徒歩で台湾師範大学へ向かった。18:00に同大学の正門において、金沢大学国際学類アジアコース3年生であり、現在師範大へ留学中の張間美香と待ち合わせ、台湾大学や師範大学から来た彼女の友人と交流会を開いた(図9)。交流会の後には、昨年同様に19:00頃に東門近くの餃子店へ



図9 国立台湾師範大学での交流会.
Fig. 9 Exchange party held in National Taiwan Normal University.



図10 国立台湾師範大学の学生らとの夕食会.
Fig. 10 Dinner party with students of National Taiwan Normal University & c.

移動し、皆で夕食をとった(図10)。

交流会へ出席して下さった師範大の学生諸君は、みないずれも聡明あり、日本語も上手な方が多かった。また、日本語か中国語の会話に詰まった際に時折用いた英語も流暢であり、改めて同大学の学生のレベルが高いことを実感した次第である。また張間との会話からは、こうした学生に囲まれた留学生生活が非常に刺激的であり、十分に満喫している様子が言葉の端々から感じられた。ちなみに彼女のルームメイトはいずれも西洋人であり、寮における日常生活では中国語に加えて英語もしばしば用いているとの事である。なお張間には、師範大学の翌日に訪問したYKK台湾・台湾SONY・日勝生加賀屋にも同行してもらった。

IV. その他

1) 台北二二八紀念館

台湾で1946年に発生した二・二八事件の70周年にあたる2月28日(火)の午前中に、二二八紀念公園を参観した(図11)。この日には公園の中心部にあるモニュメントの前で、同事件を記念するための式典の準備が進められていた(図12, 13)。台北二二八紀念館は10:00開館とのことだったので、まずは公園の周辺にある国立台湾大学附属病院の建物を見学し、総督府を正面から眺めてから、改めて紀念館の前に戻った。紀念館の前では「二二八音楽季」という音楽祭が開かれており、この日は震撼管楽団というブラズバンドが、台湾でもかつて人気のあった日本のポピュラー音楽(ピンクレディー・森進一・山口百



図11 台北二二八紀念館。

Fig. 11 Taipei 228 Memorial Museum.



図14 震撼管楽団による演奏。

Fig. 14 Performance of the Shock Concert Band.



図12 二二八紀念公園のモニュメント。

Fig. 12 Monument in the 228 Peace Memorial Park.



図13 記念式典の準備についての通告。

Fig. 13 Notice of the commemoration ceremony's preparation.

恵など) や、テレサ・テンの楽曲を演奏していた(図14)。10:30頃まで演奏を聴いた後、1時間ほど紀念館を参観した。

この博物館は毎年学生を引率して参観しているが、二・二八事件の70周年ということもあり、館内はかつて見たことがないほど混雑していた。この日は無料で入館できたこともまた、入場者が多かった理由の一つであろう。参観者の中には日本語を話すことのできる方も多かったようで、ある学生は館内のあちらこちらで、日本語で声をかけられたそうである。

2) 共生音楽節

2月28日の午後、総督府の前の通りを遮って設置されていた「共生音楽節」の会場を見学した(図15)。ここには二・二八事件をはじめとする、台湾の民主化の経緯を示す展示や、民主化運動の担い手である政党・NGOなどのブースが設けられていた。筆者らはここで陳文成基金会という団体が販売していた



図15 共生音楽節。

Fig. 15 Gongsheng Music Festival.



図16 独立ビール。
Fig. 16 Independent Beer.

「独立ビール(150台湾元)」を購入したほか(図16), 228というロゴが入ったクッキーをいただいた。

3) 国父紀念館

2月28日(火)の午後に訪問した(図17)。この日は二・二八事件の70周年にあたる日だったことから、同事件に関与した蒋介石を顕彰する中正紀念堂は閉館していた。しかし、蔣同様に国民党の立役者である孫文の功績を記念する国父紀念館は、通常どおり開館していた。ざっと見た限り、中国大陸からの観光客は昨年ほど多くはなかったように感じられた。



図17 国父紀念館。
Fig. 17. National Dr. Sun Yat-sen Memorial Hall.

4) 中正紀念堂

3月1日(水)の午前中に参観した(図18)。上述したとおり、前日の2月28日は閉館していたが、敷地内で騒動が発生したと報じられていた。国父紀念館と同様に、昨年と比較して中国大陸からの観光客が大幅に減った印象を受けた。その反面、韓国からの観



図18 中正紀念堂。
Fig. 18 National Chiang Kai-shek Memorial Hall.

光客が比較的目立った。また、親中政策を採る国民党の馬英九が政権を担当していた昨年の来訪時には、1階に抗日戦争を紹介する展示があったが、今年はそのようなものは見当たらず、代わりに中正紀念堂を描いた絵が陳列されていた。いずれも、昨年5月に民進党の蔡英文が総統へ就任したことの影響であろうか。

5) 故宮博物院

3月4日(土)の午前中に参観した(図19)。同館では、国際学生証を提示した学生には入館料の割引を行っていたが、今年研修に参加した学生はみな持っておらず、正規の金額を支払わざるを得なかった。参観中、筆者の近くを歩いていたガイドの話によれば、著名な「東坡肉(豚肉の角煮)」を形取った石は、現在は台湾の南方に新しく建設された故宮博物院の分館に展示されているとのことである。

土曜日だったこともあり、非常に多くの旅行客で



図19 故宮博物院。
Fig. 19 National Palace Museum.

賑わっていたが、中正紀念堂や国父紀念館と同じように、中国大陸からの観光客は昨年よりも明らかに少なかった。

6) 紅毛城・淡水近郊

3月4日(土)の11:00過ぎに故宮博物院を出て、淡水に移動した。淡水駅から徒歩で同地の旧跡(福佑宮(図20)・淡水禮拜堂(図21)・淡水街長旧宅(図22)・真理大学オックスフォード・カレッジ・旧淡水海關事務所)などを回った後、紅毛城(旧イギリス領事館)を参観した(図23, 24)。媽祖を祀っている福佑宮では、そこを訪れていた老人から日本語で中国式の占いの方法を教えていただき、みなでクジを引いて一喜一憂した(図25)。また、昨年来訪した際には、旧淡水海關事務所と紅毛城は無料で見学することができたが、今回は両方の施設で合計80台湾ド

ルの参観料を支払わねばならなかった。



図22 淡水街長旧宅.

Fig. 22 Former Residence of Tamsui Township Head.



図20 福佑宮.

Fig. 20 Fu You Temple.



図23 紅毛城での集合写真.

Fig. 23 Group photo in the Fort San Domingo.



図21 淡水禮拜堂.

Fig. 21 Tamsui Presbyterian Church.



図24 紅毛城.

Fig. 24 Fort San Domingo.



図25 福佑宮で賽銭を入れる。

Fig. 25 Offering coins at the Fu You Temple.

V. おわりに

以上が今回の研修の概要である。最後に、帰国前日の3月4日（土）の夜にホテルで反省会を開いた折に、学生諸君から聞くことができた意見を紹介したい。

今回の研修に参加した学生は、おしなべてその内容を評価していた。例えば、ある学生は、海外での勤務には興味を抱いていたが、いきなりインターンシップに参加するのはいささか荷が重いと感じていたという。そのため、今回の研修は海外での勤務を実際に見学できる最初の機会として、丁度良かったとのことであった。また、学生とほぼ同世代の若い方々と直接話をすることができたYKK台湾での経験は、非常にポジティブな印象を残したようである。とりわけ同社の方々から、「当初は海外で働くつもりはなかったが、実際に働いてみると大変面白かった」といった、日本国外で働くことの積極的な意義を直接学ぶことができた点が、こうした評価に繋がっていると言えよう。また、海外で働く方々と直接お会いすることで、海外で働くことについての印象が随分変わった、という感想を述べた学生もいた。さらに、ある学生は今回の研修でお会いした全ての方々に、外国の方と仕事をする際に心がけていることを質問し、熱心にメモをとっていた。こうした学生側の積極的な姿勢もまた、訪問先の企業に良い印象を与えたものと信じたい。

一方、企業訪問の合間を縫って訪問した博物館の印象や、台湾師範大学の学生との交流を高く評価する学生もいた。例えば、ある学生は台湾師範大学の

学生が日本の文学作品について豊富な知識を持っていることに驚き、自分も勉強しなければならないと感じたという。このように、自身が必ずしも自国のことをよく知っている訳ではないと身をもって感じたこともまた、これからの勉学にいい影響を与えるであろう。

また、今回の研修に参加することを通じて、海外で働くことに積極的な本学の学生と知り合うことができてよかった、という感想を述べた学生がいたことも特記したい。近年、企業や大学のグローバル化はますます進展しているが、こうした流れに敏感で海外での勤務を志向する学生が、各学類内で同じような考えを抱いている学生と巡り会えるとは、必ずしも限らない。こうした学生にとって、本事業がある種の架け橋となったことは、引率した教員にとっては思わぬ僥倖だった。

謝 辞：最後に、今回の研修でお世話になった各企業の担当者の方々、本研修に対して助成金を交付していただいた金沢大学国際機構、さらに教員2名に対して引率に必要な経費を学生教育経費から支給していただいた加藤和夫学類長をはじめとする国際学類のスタッフの方々に、心からお礼を申し上げたい。

注

- ¹⁾ なお、この事業に先行して実施された、中国の華東地域や東南アジア・台湾における日系企業の訪問については、弁納（2009）、弁納（2012）、弁納・古泉（2014）、弁納・古泉（2015）、弁納・古泉（2017）、弁納・周（2010）を参照されたい。

文 献

- 弁納才一，2009：華東地域における日系企業の現況－2009年9月－。金沢大学経済論集，30，345-360。
 弁納才一，2012：中国華東地域における日系企業等への再訪記録－2012年3月－。金沢大学経済論集，33，265-287。
 弁納才一・古泉達矢，2014：東南アジア・台湾における日系企業等への訪問記録－2014年3月－。金沢大学経済論集，35，189-207。
 弁納才一・古泉達矢，2015：台湾における日系企業等への

訪問記録－2015年3月－. 金沢大学経済論集, 36, 193-220.
弁納才一・古泉達矢, 2017: 台湾における日系企業等への
再訪記録－2016年3月－. 日本海域研究, 48, 71-79.

弁納才一・周 如軍, 2010: 中国華東地域訪問記録－2010
年2月・3月－. 金沢大学経済論集, 31, 197-210.